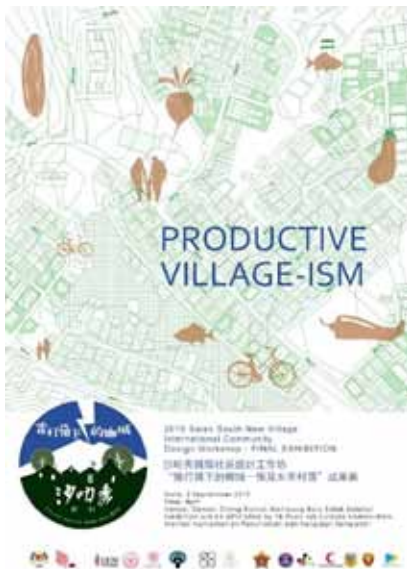


2019年の夏、マレーシアで 国際ハウジングワークショップが行われました

国際ハウジングワークショップとは台湾の淡江大学 Kuang Chein Bee 准教授と、住居学科篠原聡子教授が中心となり、2006年から継続的に開催しているワークショップです。学生は全大学混合のグループに分かれ、英語やスケッチ・図面等を通してコミュニケーションを図り、課題に取り組みます。最終講評会後にはエクスカージョンもあり、ワークショップ後も学生同士の交流が盛んに行われています。



集合写真



最終好評会のポスター



新しい村の提案

参加した学生からの報告

2019年の夏休み期間中の2週間にわたって、マレーシアで国際ハウジングワークショップを開催しました。マレーシアのクアラランプールにあるサラック・サウス・バルという村に行われました。日本女子大学と台湾の淡江大学は毎年この国際ハウジングワークショップを合同で行いましたが、今年初めてマレーシアのUCSI大学が加えることになりました。淡江大学と日本女子大学、UCSI大学、佐賀大学、日本大学で合計40人の学生が参加しました。

敷地のサラック・サウス・バルは首都の郊外にあります。都市開発が進んでいることによって、この村の良さが段々薄れていることが問題になっています。それに対して我々学生たちは村の要素を取り戻すために調査して、新しい村を提案しました。5日間にわたって私たちは村に滞在して、

村の人々と交流しながら、要望も聞きつつ調査を行いました。その後の2日間に作業時間、そして次の2日間は公開プレゼンと展示でした。残りの滞在期間は現地の建築見学でした。

この2週間のワークショップに参加して、とてもいい思い出になりました。村のコミュニティづくりというメインテーマで現地の人々との協力し合い計画を考えました。学生としてはなかなか得られない経験だと思えます。指導して下さいました教員たち、そして村の人々にとても感謝しております。

篠原研究室 修士1年 濱川はるか



定行まり子先生が

「2019年度都市住宅学会賞論説賞」を受賞しました！

都市住宅学会とは…

都市住宅の立地、建設、流通、機能等、及びこれらをめぐる社会、経済、技術、文化の各領域における諸現象のメカニズムを実証的に把握する（実証科学）とともに、社会システムや居住空間等の望ましいあり方を研究する（規範科学）総合学としての「都市住宅学」を構築することを目的として設立された。（都市住宅学会 HP より引用）

受賞論説

「日本の少子社会における子ども・子育て世帯の現状—住居学の視点から—」

（都市住宅学 100号、2018年1月、59-65頁）

選考理由

本論説は 少子化に関わる社会動向、国・自治体・民間の取り組み、都市住宅学における特集記事を概観し、少子化の視点から求められる住居の機能を分析、そして最後に住居学分野が学際的に取り組むべき今後の3つの課題を提言している。これらの中で特に着目すべきは、少子化や保育環境づくりの問題を、夫婦共働き世帯数の増加、夫の家事・育児に費やす時間や児童虐待リスクなども関連づけ言及していること。1989年の1.57ショックに始まる多方面の取り組みや都市住宅学の特集を、時間軸に沿って関連づけ解説していること。そして家族の変容、機能の外部化・社会化、働き方改革なども視野に入れ、住居や保育施設のあり方を論じていることなどがある。これらは、学際性を旨とする当学会の100号の記念誌に適した大変価値ある論説である。

以上の理由により、都市住宅学会賞論説賞にふさわしいと評価される。



住研スタッフより



青木賀津子 助教

2020年1月より

住研スタッフに加わります。

大学を卒業後、設計事務所や建設会社で、個人・集合住宅、福祉施設、保育施設などの設計に携わってきました。その後、自らの設計事務所を立ちあげ、保育施設の設計を専門にしてきましたが、現在の保育施設の環境づくりのあり方に疑問を感じたことをきっかけに、人間生活学研究科生活環境学専攻（大学院博士課程）に進学し、保育方針や教育思想と空間・環境との関わりについて研究に取り

組みました。博士論文提出後は、研究を継続しながら、設計指導などで住居学科と関わってきましたが、このたびご縁があり2020年1月に助教に着任いたしました。今後は、学生の皆さんの住居学科での学びや、卒業後のキャリア形成のサポートを第一に、学生の皆さんとともに、さまざまな問題解決に取り組んでいきたいと思っています。どうぞよろしくお願いいたします。